

# 毎日新聞の11・14報道への抗議声明

2021年11月28日

## 大坂正明さん救援会

東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階  
03-6822-5049 oosakaqen@yahoo.co.jp

毎日新聞は11月14日付朝刊社会面において、渋谷暴動事件50年の特集記事を掲載しました。しかしながらその内容は、71年11・14闘争がどのような時代背景のもとに行なわれたのかを掘り下げるものではなく、デモ隊との衝突で死亡した中村巡查を「事件の被害者」扱いし、大坂正明さんを「有罪」と決めつける許しがたい内容です。私たち大坂正明さん救援会は、このような国家権力の片棒を担ぐ記事を平然と掲載した毎日新聞に強く抗議します。

第一に、大坂正明さんが「殺人犯」であることを前提にして報道していることです。大坂さんは無実であり、完全な政治的でっち上げ事件です。大坂さんは過酷な弾圧を強制されながらも、「私は無実だ」と50年間も叫び続けてきました。その苦闘を一切報じることなく、正義・真実に目をつぶり、ねじ曲げ、これから始まるうとしている裁判を前に大坂さんを「犯人」だと決めつけるもので、断じて認めることができません。特に、大坂さんの裁判は裁判員裁判が前提となっています。検察官も弁護人も裁判員裁判からの除外を申し立てていますが、まだ決まっていません。裁判員に予断と偏見を与え、公平・公正な裁判を阻害するキャンペーン記事であると断ぜざるをえません。

第二に、渋谷暴動50年と見出しを掲げながら、事件の背景について何一つ触れていません。1971年は沖縄闘争の年であり、返還協定をめぐって日本中が揺れていました。11月14日の渋谷デモも、沖縄返還協定批准阻止闘争でした。このことに言及しない記事は、今現在沖縄で進められている、民意を踏みこむ基地建設やミサイル配備という政府の改憲・戦争への動きに乗るものです。50年前、沖縄民衆の「核抜き本土並み」要求が政府によって踏みこまれ、ペテン的返還協定が批准されようとしていることに対して、沖縄では返還協定に反対する全島ゼネストが闘われていました。11月10日の闘いでは、警察官が死亡する事態に発展するほど、沖縄民衆の怒りは高まっていました。この沖縄の血叫びに応えようと、本土の青年・学生たちが立ち上がったのが渋谷暴動闘争と呼ばれる11・14デモでした。時の政府は民衆の闘いを警官隊の暴力で押しつぶそうとしました。東京では集会やデモが禁止され、全国から動員された1万2千人の機動隊で厳戒態勢が敷かれました。警察官がこん棒やガス銃で武装し、デモ隊に激しく襲いかかることで「鎮圧」を図る、非常に暴力的な「警備」でした。警察の暴力によって守られた国会に異を唱えるには、この重苦しい現実を突破する人民の実力決起が必須でした。渋谷暴動闘争は、機動隊の阻止線を実力で突破して万余の群衆とともに「沖縄返還協定批准阻止」の叫びを政府に突きつけた歴史的な闘いとなったのです。

第三に、警察官を被害者として描いていますが、事件当日東京で展開していた機動隊は市民を守るために警備を行っていたわけではありません。基地と戦争に反対し、自らの力で社会を変革しようと立ち上がった沖縄と全国の人々の決起を弾圧するために全国から集められたのです。それはペテン的沖縄返還協定を批准しようとする当時の自民党佐藤政権を守る行動でした。犠牲となった中村巡查を一般的な被害者として描くことは、真実から目を背ける行為です。

渋谷闘争に関連して「殺人罪」で逮捕された7人は、物的な証拠が何一つない中、政治的にでっち上げられました。デモ参加者への違法・無法な拷問的取調べの数々は、故星野文昭さんの裁判などで暴露されています。大坂さんの裁判は、国家権力のでっち上げを全面的に暴く闘いであり、検察官＝国家権力との激しい攻防が現在進行形で闘われています。私たち大坂正明さん救援会は、公判開始前に大坂さんを有罪と断ずる毎日新聞の報道姿勢を徹底弾劾します。半世紀も前の事件で起訴した異常性、物証のないでっち上げ裁判と徹底的に闘い、必ず無実の大坂さんを取り戻す決意です。

# 11月14日付毎日新聞朝刊に掲載の 「渋谷暴動事件50年」の記事を弾劾する

2011年11月28日

**星野さんを取り戻そう！全国再審連絡会議**

東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階

電話 03-3591-8224 FAX 03-3591-8226

11月14日付朝刊社会面の記事は、大坂正明さんを「機動隊殺害の犯人」だと決めつける極めて悪質なキャンペーンであることを弾劾する。

同時に星野文昭さんが、物的証拠もないままにでっち上げの調書のみで無期懲役にされ、44年間も投獄され続けた上、肝臓がんを巨大になるまで放置し、でたらめな手術を強行したことによって命を奪われた事実を全く無視抹殺していることを強く断罪する。これは、警察情報のみに基づくものであり、報道の最も基本的な原則から逸脱したデマキャンペーンで、全国紙としての死にも等しい自殺行為である。

1971年11月14日、何よりもこの日は沖縄返還協定国会批准を前にし、それを阻止するために渋谷に結集して闘おうと呼びかけられていたのである。それに対して佐藤政権は全国から動員された1万2000人の機動隊員で街全体を戒厳状態に置いたのだ。

これを打ち破って万余の民衆が渋谷に集まり、313人の逮捕者を出しながら深夜まで闘いが行われた。この戦端を切り開いたのが代々木八幡駅から渋谷の街に突入した星野文昭さんたち200人のデモ隊だった。

機動隊は、神山交番の前で阻止線を張り、デモ隊が渋谷方向へ向かうのを阻止しようとした。ガス銃で武装した中村巡査を含む機動隊は、水平撃ちを行ってデモ隊を制圧しようとしたが、阻止線はすぐにうち破られ機動隊は逃走した。その混乱の中、最後までガス銃を撃ち続けた中村巡査が死亡したのである。

事態に驚愕した佐藤政権は、警察庁長官後藤田正晴の「警察官殺害の犯人を検挙せよ」の命令下なりふりかまわない弾圧に踏み込んだ。年を越えても「犯人」を逮捕することができない中で、デモ隊のリーダーだった星野さんに目を付け、「群馬軍団」なるものをでっち上げて群馬の学生を次々と13人を逮捕したのである。まさにでっち上げに基づく政治的大弾圧事件である。

今日の沖縄の現実、50年前に沖縄の労働者民衆が求めた、“基地も核もない沖縄”とはかけ離れた米軍基地が居座ったままの姿である。あろうことかすべての沖縄民衆の反対を踏みにじて、辺野古新基地建設のために海への土砂投入を強行し続けているのである。

さらに4月の日米共同声明にもとづく対中対決政策下、対中国戦争が画策され、九州から沖縄に至る琉球弧はミサイル基地として、再び戦場の島へと投げ込まれようとしているのである。断じて許すことはできない。

毎日新聞は、この報道の原則を踏みにじた記事を撤回し、全面的に謝罪することを求めるものである。

毎日新聞社 山形支局長 様  
本社 編集長 様

山形県白鷹町畔藤 1001-1 大河内次雄気付  
沖縄と連帯し星野文昭さんを救う会・山形

### 「渋谷暴動事件 50 年 巡査犠牲『真相知りたい』遺族の思い継ぐ」記事について

御社の 11 月 14 日付けの記事に深く失望しました。御社が、少なくとも 1945 年敗戦以降の数多く存在する冤罪事件や、劣悪な刑務所内処遇へ批判的精神を持ちえず、更にその深刻な実態を暴く努力を放棄するかのよう記事になっているからです。この記事を書かれた記者本人の責任だけでなく、御社の編集方針・オピニオンリーダーとしての御社全体の経営方針と深くかかわりがあると言えます。

これからの御社を背負う未来を切り開くべき若い世代の記者諸君が、批判精神を涵養し真の民主政治の基盤を作り上げる、報道機関の矜持に満ちた記者としての人生を歩ませてくださるよう望みます。下記により問題点を述べますので、ぜひ御社の責任ある回答と謝罪、そして今後の紙面の見直しを望み、これからの御社の動向に期待します。

#### はじめに

少なくとも、1945 年以降発生した多くの殺人事件などの裁判で幾多の冤罪事件があり、市民や国民救援会などが“冤罪を受けた受難者の”支援をし、心ある法曹関係者・弁護士とともに雪冤に向けた活動をしてきました。その裁判の過程で明らかになったことがいくつかあります。

- ① 警察・検察の取り調べの実態が非道だったこと。
- ② 警察・検察がその職務上知りえた証拠・証言を、“冤罪を晴らす側”に全く伝えないこと。
- ③ 検察が多分にメンツの問題であるのか特別抗告をして、再審の邪魔をすること。  
——などが明らかになっています。

取り調べの可視化・証拠の全面開示に加え、再審制度を見直し“冤罪を生み出さない司法”が、未来の日本社会には少なくとも必要です。もろもろの事件の真相解明を妨げていたのは実は捜査機関・警察やそれを助長する検察であり、裁判の段階でもその傾向を是正しえない不十分性がある——と言えるのではないのでしょうか。

#### 具体的問題

11 月 14 日付けの記事には不思議なことがあります。マスコミには『渋谷暴動事件』として取り上げられてきたこの事件の中村巡査殺害犯として、40 年間以上拘束され最後には徳島刑務所で発病し、杜撰な医療と手術の結果、その二日後に死亡した 星野文昭さんのことが全く触れられていないことです。

私たちはひょんなことから文昭受刑囚の連れ合いと知り合い、文昭さんが拘束されていた徳島刑務所の受刑者に対する処遇の実態を知り、その劣悪さを知る貴重な経験をしました。時ならずして、名古屋刑務所での刑務官の懲役囚への報復的な悲惨な肉体的懲罰が、受刑者の死をもたらしました。さすがに刑務所内処遇の改善を求める機運が高まり、国会の全員一致で処遇法が「90 年ぶりに改善」されました。

しかしその後、刑務所内の処遇は、旧来の懲罰的な処遇へと逆戻りし、面会の制限や刑務所内医療体制は旧来に戻り、より一層劣化しています。コロナ蔓延での各地の刑務所での非人間的対応を、マスコミが批判したのは記憶に新しいものです。

更に、「中村巡査死亡という痛ましい事件の真相は」という記事の背後には、幾多の殺人事件の真相究明がなおざりにされ、警察や検察そして犯人を特定し断罪する裁判の過程で、司法三者が知りえた証拠や捜査

過程での取り調べ・尋問記録などが秘密とされている事があげられます。

足利事件・布川事件・東住吉事件など多くの裁判で犯人が野放しのまま放置される傍ら、冤罪で人生の大半を刑務所で過ごさざるを得ず甚大な不幸を被った人の存在が忘れられています。どの事件でも、マスコミは警察・検察の情報を独自の調査をせずに、冤罪者の性向をもてあそび暴き立てて、『冤罪を助長する報道を』行ってきました。

今回の記事には司法三者の意向に沿って、大坂正明さんがあたかも真犯人であるかのような、しかも中村巡査の親しき友人のその思いを利用して記事を組み立てているとしか思えず、ぞっとします。

私たち一般の市民が、時に被害者を気の毒に思い犯人を糾弾したくなるのは、しかたないです。しかし報道とは、世論を誘導し真実の途へ真相を究明する責務を自覚し、そのために自己を律する覚悟を持ち得なければ時代を切り開くことなど出来えません。真実と真相の究明は報道の原点であり、そこにこそ未来が切り開かれます。

御社は、過去の犯罪・刑務所処遇報道の検証と、その総括を若手の記者に呼びかけ、それを後押しして真の報道機関に立ち直ってほしいと、長年の毎日新聞読者として強く切望します。

## 追伸・補足資料 by 大河内

———星野文昭さんが、何故東日本医療センターへ移送・移管され杜撰な手術を受けねばならなかったのか。徳島刑務所は四国矯正管区に所属し、その刑務医療は大阪医療刑務所でしょうから、これは全く異例のことです。彼の病状がいよいよ隠しおおせなくなり、重症化が明らかになってから徳島刑務所は彼の容態とその経過を西日本の刑務所医療のセンターである、大阪医療刑務所に連絡を入れたことは、全国医療刑務制度の構造上確かなことだと思われる。しかし何故かそれは棄却され、難百キロも離れた東京都の東日本医療センターに重病の星野さんが行かねばならなかったのか甚だしく疑問が残ります。

### 仮説その1

「その症例の重大さから、より充実した医療設備と有能かつ優秀な医師を含むスタッフが存在する？ 東日本へ移送・移管されたのだろうか」との”推測“

———これは星野さんの手術とその後の経過から考えると受け入れがたいです。しかも、重病患者の容体に極めてリスクを伴う通常車両での10時間もの長距離移動を、徳島刑務所の医療スタッフが送り出し、東日本側がその受け入れを認めたことがまず信じられない行為です。

一般的医療従事者が持つ医療の誠実さを持っていれば、すでに前年の患者の容態の推移からもう少しまともな医療的判断をくだしていたでしょう。患者の長距離移送ではなく、東日本医療センターに手術できる医者はおらず、外部から医者連れてきたのだから、より近距離の医療施設の利用と「医者の派遣」を推薦し、東日本への受け入れを拒否していたでしょう。

### 仮説その2

徳島刑務所から連絡を受けた“所轄の大阪医療刑務所”は、徳島からの措置経過報告が医療引継ぎの常識的基準に全く満たないものであり、命と健康を守り手助けする精神に反する“徳島刑務所の医療体制の杜撰さに”匙を投げ、医療としての受け入れを“拒否”したのではないのでしょうか。大阪医療刑務所には誠実な医療判断が下せるスタッフが存在し、東日本医療センターには存在しなかったから安易な受け入れをして、杜撰で非道な医療行為に値しない処置をしたのだろうかと思えます。

以上の推論はあくまで私、大河内の想像上のものであり、このような想像をさせてしまう刑務所内医療の劣悪非道な現状は、許しがたいものです。

11月14日付毎日新聞朝刊に掲載の「渋谷暴動事件50年」の記事に抗議すると共に、謝罪し撤回文を掲載することを要求します。

2021年12月3日

三多摩星野文昭さんを救う会

11月14日付朝刊社会面の記事は、大坂正明さんを「機動隊殺害の犯人」と決めつける報道です。この報道を知り驚きと怒りで身が震えました。これは、警察報道のみに基づくものであり、大坂さんをデッチあげるための報道です。謝罪し撤回する文書を出して下さい。

第一に、大坂正明さんは、無実でありながら46年間指名手配されていました。4年半前に逮捕されてから東京拘置所に拘留されていますが、接見禁止で友人とも面会できていません。鼻の病気があり、喘息に苦しんでいます。手術や治療も許可されません。すでに拘置所において日々拷問がくわえられているともいえる状態にあります。

裁判も開始されていません。それなのに、警察報道のみで、「機動隊殺害の犯人」といえるような報道は、間違っています。裁判所や検察を批判することもなしに、あたかも犯人であるかのような虚偽の報道に抗議します。真実と事実を報道して下さい。

渋谷暴動事件50年、巡査犠牲「真相知りたい」、遺族の思い継ぐ「親友」父子という見出しは、世間に真実を伝える報道機関として自殺行為です。

新聞社たるもの、調査し、何故この事件が起きたのか。時代背景を探り、現在の沖縄の状況は、他に犠牲者はどうであったのか。等々を調査して書くべきです。

戦後、沖縄は27年間米国に占領され続けました。沖縄の人々の「基地も核もない沖縄の返還」を求めての長い闘いの結果、1971年沖縄返還が決められようとしていました。しかし「核つき、基地の固定化」の返還でした。これに反対する沖縄の人々はゼネストで闘いに立ち上がりました。その沖縄の闘いに応えるための闘いが渋谷闘争でした。当時の佐藤政権は、破防法を発動し戒厳令下におき弾圧体制をしいたのです。池袋では、永田典子さんが機動隊の襲撃によって虐殺されています。これについては、立件もされず不問に付されたままです。永田典子さんの家族、友人の声を記者は調査したのですか。

渋谷暴動事件50年を書くのであれば、星野文昭さん、奥深山幸男さんのことも書くべきです。

星野文昭さんは、デッチ上げられて、無期懲役で獄中44年獄死させられました。その事実を何故書かないのですか。44年間服役させられ、巨大な肝臓がんを患い、東日本医療センターで手術しましたが、ICUにも入れられず十分な医療体制も取られることなく2日後に亡くなりました。現在国家賠償訴訟中です。

奥深山幸男さんは、公判中の発病によって長期の公判停止が続き、免訴、公訴棄却の訴えを42年間棚ざらしにされました。そしてその生涯を閉じました。そのことを何故書かないのですか。

今日の沖縄の現実、50年前に沖縄の人々が求めた、基地もない核もない沖縄とはかけ離れた米軍基地が存在し、さらに辺野古新基地の建設が強行されています。基地を強化し、ミサイルの配備まで画策されています。三度沖縄が戦場の島へと投げ出されようとしている今、それに加担する行為です。毎日新聞は、記事を撤回し、全面的に謝罪することを求めます。

## 抗議文

2021年12月3日

毎日新聞社 御中

千葉・星野文昭さんを取り戻す会  
千葉市中央区要町2-8 DC会館1F  
連絡先 0439-29-3287

私たちは、無実にもかかわらず1971年11月14日の沖縄闘争（以下、「11・14 渋谷闘争」）で無期懲役の刑を受け、44年間も獄中に捕らわれたあげく、肝臓がんの発症で徳島刑務所・東日本成人矯正医療センター（以下、「医療センター」）の非人間的医療によって2019年5月30日獄死を強制された故星野文昭さんの国家賠償請求訴訟の闘いと、再審・無罪を求めて千葉で支援している星野救援会です。

御社の11月14日付け、「渋谷暴動事件50年 巡査犠牲『真相知りたい』遺族の思い継ぐ」という記事について、抗議します。

この記事では、故中村恒雄氏の「親友」とその長男氏の思いなどが紹介され、それと故星野文昭さんと共に11・14 渋谷闘争を闘って、2017年に逮捕・起訴されている大坂正明さんの記事が記載されています。しかしながらその内容は国家権力の意志に付度したキャンペーン記事だと言わざるを得ません。

第1に言いたいのは、「親友」父子氏は「真相を知りたい」「どうしてそこまで……」ということですが、記事では事件の背景について何一つ触れていません。

1971年は沖縄返還協定をめぐって日本中が揺れていました。沖縄民衆の願いは「核ぬき本土並み」沖縄返還でした。その思いを踏みにじった返還協定が批准されようとしていました。これに対して沖縄では全島ゼネストを頂点とする闘いが闘われていきました。

これに応じて本土で闘われたのが、11・14 渋谷闘争でした。当時集会・デモは禁止され、1万2千人の機動隊を動員して厳戒態勢がとられましたが、こん棒やガス銃で武装した機動隊の阻止線を打ち破って渋谷駅に向かってデモ隊は進んでいきました。

その弾圧側にいた一人が中村恒雄巡査だったのです。阻止線を打ち破られた機動隊員の多くは、脇道へ入って逃げて行ったのですが、中村巡査はデモ隊の進行方向に後退していきながらデモ隊にガス銃の水平打ちを続けて逃げ遅れ、補足され死に至りました。ガス銃の水平打ちは殺人的な行為に他なりません。三里塚では、三里塚闘争支援者の東山薫さんが、これによって亡くなっています。

中村巡査は「市民を守る」ためではなく、沖縄の人々の思いを踏みにじる国家権力の一員として国家意志を体現して、亡くなったのです。少なくとも機動隊の阻止線が破られたとき、他の機動隊員と一緒に逃げていればよかったのだと思います。

第2に、大坂正明さんを「犯人」だと決めつけた報道をしていることです。

これから始まろうとしている、大坂裁判で、大坂さんを「犯人」だと印象付ける意図を持ったキャンペーン記事だと言わざるを得ません。

大阪正明さんは、故星野文昭さん同様に物的証拠は何もありません。無実なのですから当たり前のことです。逮捕したデモ参加者への拷問的取り調べによってつくられた供述調書が唯一の証拠としてでっち上げられているのです。

その上で、無実の人を46年間も指名手配し続けること自体が異常であり、大坂さんは本来であればとっくに時効が成立している事件です。

それが、今4年間も東京拘置所に未決拘留され続けているのです。

第3に、国家権力は、中村巡査の死については口を極めて非難しますが、別のデモ隊にいた関西の教育労働者の永田典子さんが池袋駅構内で機動隊暴力で亡くなったことについては不問に付したままです。御社を含むメディアもとりあげません。

第4に故星野文昭さんのことについては何一つ書かれていないことです。

11・14渋谷闘争の意義については、第1のところで簡単に述べました。

1975年に逮捕後、星野さんは一貫して、11・14渋谷闘争の正義性と中村巡査殺害に関与していないことを主張し続けてきました。1987年に無期懲役の刑が確定しましたが、その後も第1次、2次の再審請求を行って来ました。再審闘争では、星野さんを犯人にでっち上げた証拠構造を破綻に追い込みました。それでも、裁判所は有罪を維持し続けているのです。

星野さんは、長い獄中生活で体を蝕み肝臓がんを発症しました。2018年には激しい腹痛で倒れましたが、徳島刑務所の医師は「胃けいれん」と診断して1日病舎に休ませただけで作業に復帰させたのです。しかし、その後も食欲不振と体重減少が続きました。2018年にくり返し精密検査を要求したのに刑務所はこれを無視し、星野さんの肝臓がんが巨大化するまで放置し続けたのです。健康診断で、2017年には異常値が示されているのです。

星野さんは、徳島刑務所と医療センターの非人間的医療によって2019年5月30日獄死を強制されたのです。

医療センターは、肝臓右葉を切除するという大手術を行ったのに、術後の再出血に対する備えがありませんでした。星野さんが術後入れられたのは事前の説明にあったICUではなく、ただの「回復室」でした。外部から呼んだ執刀医も主治医も帰ってしまいました。

血圧が急激に下がった18時50分、当直の麻酔医は執刀医を呼び戻すこともせず、漫然と昇圧剤を注射しただけでした。この段階で再開腹して出血を止める措置が行われなければならなかったのにしなかったのです。国家による殺人だと言わざるを得ません。

私たちは、星野国賠・再審に勝利するために闘っていきます。大坂正明さんを守り大坂裁判闘争勝利のために闘っていきます。星野さんらの支援で知った、獄中・入管医療のあまりに非人間的な在り方を問うていきます。沖縄と連帯して、改憲・戦争阻止の運動を闘っていきます。

御社毎日新聞は、当該記事を撤回し、「真実と真相の究明」の報道の原点に立ち返った報道をすることを求めます。

以上